

『善き弟子』におけるサインを巡って

Signs in *The Good Apprentice*

(1992年4月8日受理)

森 元 洋 子

Yoko Morimoto

Key words: Iris Murdoch, *The Good Apprentice*

マードック (Iris Murdoch) は従来、『唯一の完全なる神秘的存在』或は、『関心を向けるべき唯一の真の対象』⁽¹⁾を Good (善) と定義づけ、善に至る道として主人公達に自我の抑制と自己滅却の暗闇を歩ませてきた。しかし、*The Good Apprentice* (1985) の主人公エドワードは物語の終わりで自らは闇を通過し太陽の光り (= 善) を目にしうる存在ではないとの認識に至る。『暗闇』、『善』という概念こそ錯覚であり、巡り巡って辿り着いたところはもとの場所であった、生涯を闇の中で生きることこそが現実であると知ることによって物語は閉じられる。

...the awful fact was that he had not moved an inch, all movement, all journeying, had been an illusion, he was back at the beginning... It was all hallucination, everything that seemed good and ordinary and real. That wasn't for *me*. The light which I saw wasn't the sun. It was just a reflection of the fires of hell.⁽²⁾

最新作である *The Message to the Planet* (1989) においても本作品同様、マードックは作中で日常生活の重要性、それらの生活を通して培われる人間関係の大切さを強調しているように思われる。これは『善』という抽象的な観念の世界を作中人物に与えるだけでは彼らを救済し得ない、思弁の領域に留まっていたのでは問題は解決し得ないと、作家自身の筆先が変更されてのことであろうか。真義のほどは不明であるが、前述したごとくマードックの近作には『善』という道德哲学を解説するような観念的描写が影を潜め、それに取って変わるかのように生き生きとした具体描写が出現していることは明らかである。

エドワードの義兄スチュワートが語るまでもなくこの物語は「サインに満ちている。 ("There are signs everywhere, everything is a sign.")」(GA P.58) 登場人物はサインを求めて行動を起こす人物とサインをじっと待つ人物に大別される。行動する人物としてエドワードが、待つ人物としてスチュワートと、エドワードの亡き母の妹ミッジの夫で精神科医のトーマスが描かれている。マードックが物語の中に提示するサインの数々はキリスト教、中世ロマンスや寓話などの衣を纏い読者の心を引き付けるが、それらのサインは交錯し合い、読者の目を眩惑させもする。

The Good Apprentice は "The Prodigal Son" (『放蕩息子』) と題する第一部から始まる。『放蕩息子』とは、新約聖書『ルカによる福音書』からの寓話であることは明らかであり、しかも文字通り『ルカによる福音書』(15.18,19) よりの引用から物語の第一ページは始まる。

I will arise and go to my father, and will say unto him, Father I have sinned against heaven and before thee, and am no more worthy to be called thy son. (GA P.1)

この聖書からの引用こそ、物語の始まりであり、終わりを予言する最大のサインと言えよう。聖書の放蕩息子は放浪の旅の末改心し、父親のもとに戻り許されるが、エドワードの旅は実の父親（ジェシー）を探すための旅であり、エドワードに課された重荷は言い逃れを一切許されない罪である。絶対的な罪を背負ったエドワードは、他の主人公達のように自己滅却の暗闇を通過して太陽の光を見る存在ではないということはすでに述べたが、物語の視点は暗闇を通り光に至る過程に置かれているのではなく、生涯心に暗闇を抱きつつも、すなわち、救いはもたらされなくとも、人と人の結び付きの中で善いことをしようとする心を持ち続けることの重要性、ある一つの体験が人間を変えることもあると同様、人は生涯を通じて体験し続け、変わり続けるのだという点に置かれている。

Anyway I'll try to do some good in the world, if it's not too difficult, nothing stops anyone from doing that. (GA P.517)

...and it occurred to Edward for the first time that there could be experiences which lasted a lifetime through, constantly changing, never disappearing; as of course Mark would never disappear. (GA P.517)

スチュワートが述べるごとく、この物語は全編を通じサインが、そして予言が散りばめられている。マードックはこの手法を用いるにあたって、キリスト教とも多に関わりを持つ中世ロマンスの『アーサー物語』、J.R.R. トールキンの『指輪物語』などの影響を受けていると思われる。

『アーサー物語』には、高潔、愛憎、勇気、友情、殺人、礼節、卑劣、臆病、徳行、悪行など生きている人間には避けることのできない宿命的な行状が見られる⁽³⁾が、*The Good Apprentice* の登場人物達も魔術師マーリンの予言に操られるごとく、人間の業を繰り広げる。エドワードの出生はアーサー王の出生と非常に似通っている。実父ウーサー王の手許を離れアーサーは、エクトル卿のもとで卿の息子ケイとともに養育される。エドワードも実父ジェシーのもとを離れ養父ハリーのもとでハリーの息子スチュワートと一緒に育てられる。ウーサー王の死によりアーサーは英国王として世界に登場したが、エドワードがジェシーの住むシーガード邸を訪れるのは、ジェシーの強大なる力と才能が枯渇し痴呆状態に陥った時である。シーガードにおけるジェシーの役割はウーサー王としてよりも、ウーサー王の良き助言者であった魔法使いマーリンとしての役割を与えられている。或は、マーリンの延長線上に存在するトールキンの『指輪物語』の老魔法使いガンダルフであろう。ジェシーの姿は物語の進行につれてだんだん曖昧になってくる。登場人物達の見る目を通してジェシーの姿が変化するからだ。サインはジェシーに向けて、或はジェシーから発せられているが、最も大きなサインはジェシーの存在そのものである。人々の見る目が試されているのである。

ジェシーは画家、建築家、彫刻家、社会主義者そして、Don Juan として権勢を欲しいままにしてきた人物である。モデルの一人であったクウォールと遊びの恋をしたジェシーは、身ごもったクウォールに興味を失い捨てた。その後クウォールはハリーと結婚しエドワードを産み、彼女の死後、エドワード

はハリーによって育てられた。言い逃れのできぬ過失により、友人マークを死に至らしめたエドワードは惨めな罪の意識に囚われ、他者との接触を絶ち機械のように自問自答を繰り返す無為の日々を送っている。

...he returned to his mechanical conversation with Mark and his wailing regret that he could not change the past. (GA P.56)

幻想に雁字搦めにされ、自らの意志で行動する力を失ったエドワードはまさに machine (GA P.57) であり, robot (GA P.57) である。この様なエドワードの前に現れた「霊媒師の言葉 (“Edward...Come to your father. Come home, my son.”) (GA P.62) がエドワードをシーガード邸に導く。

シーガードは海の近くの森の中に建てられた館でマードックが得意とするゴシック風の、現実と芸術、魔術が混じり合った超自然の世界でもある。シーガードの住民はジェシーと彼の妻マザー・メイ、二人の娘ベティーナとイローナの四人である。主のジェシーに仕える三人の女性の風貌は非常に似通っており、『アーサー物語』に多く題材を求めたラファエル前派の画家達が好んで描いた赤っぽい豊かな金髪をした中世ロマンスに登場する女性達を思わせる。ジェシーはエドワードの前になかなか姿を現さないが、エドワードが目にするシーガードの姿こそが、ジェシーの姿を伝えている。シーガードへ至る道は泥濘、容易に人々が近づくことを拒んでいるかのようであり、館の中が意外にも汚れ、古びていること、館の近くを今は廃止され使われなくなった線路が通っていることなどは、ジェシーの権力の凋落ぶりを暗示している。シーガードから海までは遠くないはずであるのに館から海を見ることが出来ないこと、館が深い霧に包まれた森の中に存在していることは、ジェシーの魔力を象徴するものであろう。人によってジェシーのイメージが違うのと同様、シーガードも見人によって異なったイメージを与える。エドワードはシーガードの中にいると大きな船の中に居るように感じ、「館に見えぬ力が作用しているように思う。 (“This place is a power-house.”) (GA P.108) だが、館の構造の複雑さは、「実体を覆い隠されている様な不安をエドワードに与えもする。 (“...I don't know how to look at it, and it's as if that makes it invisible.”) (GA P.134)

救済と癒しの場としてシーガードをとらえようとするエドワードに対し、義妹のイローナはかつてシーガードに存在していた何か偉大なるもの、美しきものは今では消滅していまい、この館の住民である自分も幸福な振りをしているに過ぎないと答える。イローナの言葉はジェシーの力が如何なるものであったかをよく表している。

There was something great here once, but we're just carrying it on mechanically in a pretend way.... There was something, it's like remembering history, something long ago to do with salvation by work, and it was anti-religious and anti-God, that was a point, a sort of socialism, and like a kind of magic too, and being beyond good and evil and *natural* and *free*—that's what's so tragic, it was something beautiful, but the spirit's gone, it's gone bad... (GA P.200)

己の罪を清めてくれる聖地 “holy shrine” (GA P.119), 癒しの場 “a house of healing” (GA P.129) にも等しいこの屋敷で暮らすことで死の誘惑から脱し、真実の生活を手に入れたかのようにエドワードは

感ずる。シーガードは癒しと救済のサインであろうか。Peter J. Conradi はシーガードを真の苦しみを經ずして、悪しき自我が善き自我に変わったかのように錯覚させてしまう⁴⁾偽りのサインとみなしている。

シーガードの虚偽性は、日を経るごとに奴隷か動物のように思考を停止し、ただ存在しているだけだという不安にエドワードを駆り立てていくこと、シーガードに到着したその日より海を見たいと思っていたエドワードは、深い霧のためその願いを果たせないでいることなどからも明らかにされる。やがて我が身をシーガードに閉じ込められた囚人であるかのように思いだすエドワードは、しきりにジェシーに会いたいとの思いを抱く。ジェシーに会うことでエドワードの運命は明らかになり、彼の罪も清められると一途に思い込む。

...everything, life and death and truth, must now depend on Jesse. (GA P.129)

It was as if Jesse were a prophet or sacred king whose presence would purify the state, making what seemed good be good, and what was spiritually ambiguous into something altogether holy. (GA P.165)

エドワードのこの態度は見ることも体験することもなく、そして苦しむこともなく、心を空しくして待つこともなく、ただ苦痛から逃れようとして狂信的に祈りを捧げることによって救いがもたらされると信ずる人々への作者の皮肉であるかもしれない。

四宮満は『アーサー物語』の作品を動かすダイナミズムは、マーリンの予言的進行から生まれる、マーリンによりある予言がなされ、後になり全くその通りに予言は実現される⁵⁾と述べている。同様にジェシーによる予言は物語の最初で既になされており、予言は実現される。'Killing place'の意のラテン語'Interfectory'と名付けられた部屋の暖炉の上に掲げられたジェシーの木彫りの銘 "*I am here. Do not forget me.*" (GA P.164)こそがジェシーの予言である。この言葉は、才能と力を失い、痴呆状態に陥りシーガードの塔に軟禁状態になっているジェシーの存在を暗示しているのみならず、主要人物達をシーガードに呼び寄せるためのサインであるという意味でより重要だと思われる。

エドワードに次いでシーガードに呼び寄せられるのは、スチュワートである。スチュワートはジェシー同様、他者に強力な影響を及ぼす人物であるが、ジェシーの対極に位置する人物として描かれている。スチュワートは菜食主義者で、独身主義を唱え、社会奉仕活動をするために学究生活を放棄しようとしている若者で、一見マードックの道徳哲学を最も忠実に受け継いでいるかに思われる人物であるが、そのスチュワートの教条主義的な生き方は周囲の大人達の批判の的になっている。スチュワートの不完全さを認識することによって、読者は逆説的にマードックの意志に辿り着くことが可能となるであろう。批判的ではあってもスチュワートの姿がエドワード同様、鮮明に描かれていることは、マードックが『放蕩息子』の弟のみならず兄の方にも深い関心を抱いたからであろう。家にとどまり、忍耐強く忠実であった兄の方が何ら報われなかったというこのたとえ話に、いかなる寓意が込められているかは別とし、マードックは行動することなく待ち続け、ただ苦しみに耐えることで人は目的に達することはできないというメッセージをスチュワートを通して発信していると思われる。周囲の人々に愛されるエドワードへの嫉妬心、幼児期から引きずっているハリーとの葛藤など自身の問題を自らを閉ざす禁欲主義的な生き方をすることによって、回避しようとするスチュワートの不完全さは、スチュワートを描く際、white, whiteness, blank, blankness, without colour という語が多用されていることでも理解される。通常、白

は純潔、完全性などを表すプラスイメージを持つ語の象徴として用いられるが、ここではスチュワートの他者との関わりを持たぬことで成立する純潔さ、その様な純潔は不完全である以外何者でもないという逆説の象徴として用いられている。スチュワートの言葉には行動により確認されたものは一切ない。理想と現実の苦い乖離を体験している大人達は、スチュワートの不完全さを見抜き批判するが、なかでもトーマスがスチュワートの本質を見抜く目は鋭い。神を信ずることなく宗教的な無私の生活を送りたいとするスチュワートにトーマスは、その様な生き方は、滅我への道ではないと断言する。

That's not the same as being unselfish, dear boy! ... It's choosing a kind of safety. Being alone is safe. Stoicism is safe. Never to be surprised, never to have anything to lose. (GA P.142)

現実社会との関わりを持たず、観念の世界だけで生きようとする人間の危うさは、トーマスがスチュワートを「白子のような」(“It was as if Stuart had become an albino, Thomas saw him as something immensely solid but without colour.”) (GA P.83) と感ずることや、「スチュワートの顔つきが子どもの頃から変わっていない (“Thomas, who had known his face for a long time, through boyhood and adolescence, wondered at how unchanged it seemed...”.) (GA P.142) と思うことから伺える。

A Word Child (1975) 以後のマードックの作品は、従来の抽象的概念 Good から、キリスト像を作中に象徴的に登場させるなど、宗教、具体的にはキリストを中心とするキリスト教への接近が伺えた。⁽⁶⁾ しかしマードックは、当初より従来のキリスト教義内での人格神としてキリストを認識してはいなかった。⁽⁷⁾ マードックは Good の体現者、リアリティとしてのキリスト像を *A Word Child* をはじめとする作品群の中で描こうとしたが、*The Good Apprentice*, 及び *The Message to the Planet* においては、Good の体現者としてキリストを捉えることにさへ限界を感じているように思われる。これら二作品の中ではマードックの目はキリストから離れ、更に根源的なものを求め飛翔しているかのようだ。

スチュワートとジェシーの対立は、キリスト教的世界と異界の対立を表す。禁欲主義的に「善き弟子 (“apprenticed to goodness”.) (GA P.138) になろうとするスチュワートの持つ危険性は、トーマスによって見抜かれ、更にはジェシーにより決定的なものとなる。シーガードを訪れたスチュワートの前に突然姿を現したジェシーはスチュワートに向かって「死人がいる。この白き者に呪いをかけた。彼をここからつまみ出せ」と命ずる。

‘There’s a dead man, you’ve got a corpse there, it’s sitting at the table, I can see it’. He pointed his stick at Stuart...

‘That man’s dead, take him away, I curse him. Take that white thing away, it’s dead. The white thing, take it away from here’ (GA P.292)

スチュワートの不完全さを表すサインとして白が用いられていることについては、既にふれたがここでも再び、スチュワートは「白き者」と表現されている。この「白き者」は、ミッジの夢に現れる「白馬の男」とも関連してくると思われる。

In some dreams, when the pale horseman passed by her, he turned towards her and was Stuart. (GA P.333)

スチュワート自身、一度も馬の背にまたがったことがないにもかかわらず、常に自らを horseman (GA P.247) であるかのようにイメージし、馬こそが唯一の「清廉潔白 (“blameless”）」(GA P.247) な存在であると考えていた。馬は心理学的には、人間の内に潜む無意識の世界を表象し、夢に現れる馬は自我を象徴する⁽⁸⁾と言われている。スチュワートに纏わる白のイメージを念頭に置き、再びジェシーの言葉に戻ろう。アーサー王物語において、白馬の騎士とは、メリアグランズに誘拐されたグイネヴィア王妃を救出に向かったランスロットを意味する。ランスロットとグイネヴィアの愛は明らかに反騎士道的であり、神をも怖れぬ行為である。この二人の傲慢な愛が、アーサー王と王国を破滅に導く引金となったのである。ランスロットのキリスト教的な自我と自由意志、対するアーサー王の異教的な宿命感の対立と同様の対立がスチュワートとジェシーの間にも存在するのではないだろうか。没我的生き方を望みながら、実は強烈な自我を持った存在であるスチュワートに対するジェシーの反発が、上述の言葉となって表れたと考えられる。何も起こらない日常から胸ときめく非日常へと誘ってくれる騎士として、ミッジが夢の中でスチュワートを求めたということも、彼が存在としてのリアリティを備えていないことの表れであろう。一見マードック的な存在に近いスチュワートをこの様な形で否定することは、アーサー王の死によって人間の意志を拒む重層的な神秘を操るものの存在を感じさせる⁽⁹⁾のと同じ存在をジェシーを通して、更には *The Message to the Planet* のマーカスを通じてマードックは模索しているのではないだろうか。

聖地と魔界を合わせ持つシーガードは、キリスト教的世界の住人であるスチュワートにとって、「ぞっとするような場所、一目散に逃げ出さざるを得ない異界だったのだ。(“He had left Seegard because something about its atomosphere appalled him.”)」(GA P.331) シーガードはエドワードに与えられた世界であり、そこへスチュワートを入り込ませたくない考えるエドワードの姿勢は、エドワードに課された試練はキリスト教的救済によっては解決し得ないことを暗示している。

Stuart was the very last person he ever wanted to see *here*. *Here, on Edward's territory*. (GA P.161)

ジェシーの持つ悪魔的な力と、善の力は次の二つのサインにより象徴される。悪魔的な力を象徴するものとしては、ジェシーがはめている指輪 “a big golden ring with a red stone” (GA P.191) があげられる。自分が死んだらエドワードにやろうとジェシーが言ったこの指輪は、トールキンの『指輪物語』の魔力を持った指輪に等しい。『指輪物語』の中で、ガンダルフはフロドに指輪の持つ破滅的な力について次のように述べている。

わしが最初そこまではとても考えてみなかったほど強力なもので、最後には、それを所有する者をも、だれかれとなく打ち負かしてしまう。指輪がその者を所有するに至るのじゃ……よいか、フロド、偉大な指輪の一つを持っている者は、死すべき者であっても死なないのじゃ。年を取らず、さらに活力を得るわけでもない。ただ生き続ける。そしてついには、その生の一刻一刻が倦怠でしかなくなる。また、もしかれが、しばしばその指輪を用いて、姿を隠すとする。するとかれはうすれていく。しまいには、永遠に姿は見えなくなり、指輪

を支配する暗黒の力の中に目に見張られながら、薄明りの中をさ迷い歩くのじゃ……強さもよき志もしょせんは続かぬのじゃー 晩かれ早かれ、暗黒の力の貪り喰うところとなるばかりじゃ⁹⁸

まさにジェシーは、指輪に支配された人間と言ってよからう。指輪の持つ魔力により、一時は権勢を欲しいままにしたが、やがてその邪悪な魔力に支配され力を失い、ただ存在するだけの哀れな姿に成り果て、狂気と正気の薄明りをさ迷っている。ジェシー本人もシーガードの住民たちもすべてこの指輪の持つ悪魔的な力に支配されているかのように思えるが、善と悪の緊張関係においてかならずしもシーガードが悪の力に操られているとも言えない。邪悪な力に対抗しようとするサインが存在するからである。それは、シーガードから唯一海に見える場所がジェシーの寝室であることによって明らかとなる。マードックは一人の人間の中に潜む善と悪の魔力を具現化させる存在として enchanter（魅惑者）を創造してきた⁹⁹が、ジェシーとマークスの enchanter としての存在の神秘性はより深まっている。この二人の魅惑者が発するメッセージは、二人ともに痴呆状態に陥り、周囲の者には彼らの言質が狂気か正気か測り難く、更には共に不可解な死を遂げることににより、解釈が困難となる。

しかし、ジェシーの神秘的な善の力は、エドワードを見ることにより一部理解可能となる。悪と善の力を備えた異界の地シーガードはスチュワートやハリー、ミッジのように迷い込む者を強く拒絶し、マザー・メイをはじめとする三人の女性達のように一旦取り込まれると逃げ道を閉ざしてしまう魔力を備えている。ただエドワードのみが、シーガードと外の世界を自由に行き来できる人間として描かれている。これはアーサー王物語の主人公が自由に異界に出入りすることが可能であるという論理と一致するすなわち、シーガードは合理的、理性的解釈を超えた世界で、ひとりエドワードのみが、シーガード（＝ジェシー）の持つ超自然的な力と奥深い部分で結び付いているということを示すものであろう。

シーガードの近くにある廃駅跡のレイルウェイ・コテージに、エドワードが過失で死なせてしまったマークの姉ブラウニーが滞在していることを知ったエドワードは、彼女に会いに行く。ブラウニーだけが彼の苦しみを理解し、彼を救ってくれると思ったのだ。コテージへの道は深い霧に閉ざされ、ジェシーの絵の世界に迷い込んだような想いに捕らわれるエドワードは、目をあげれば霧を通して黄金色の太陽が見えるとわかっていながら、敢えて太陽を見ようとはしない。

Perhaps it's just the sun, I can see the sun as a golden ball coming through the mist, only I mustn't look at it... I mustn't look at the sun. (GA P.306)

このエドワードの想いは、彼がまだ太陽を見る存在と成り得ていないということを表しているのではなく、従来の主人公たちのように暗闇の果てに太陽を見る存在ではない、自己滅却の道を歩むことにより過去の罪を贖える存在でもないということの表れであろう。いかなる体験もエドワードを救済へと導くことはない。太陽を見てはならないと思うエドワードは、ファンタジイに捕らわれ非現実の世界に迷い込んだ人物ではなく、犯した罪からの救済などありようのない存在なのだ。自らの犯した罪を現実の世界の中で受け取め、リアルな目をもって自らの罪と対峙し生きていけるかどうか、彼に課せられた試みである。

深い霧の中で迷いながらも、ブラウニーの待つレイルウェイ・コテージへと急ぐエドワードは、川底に沈んでいるジェシーの姿を発見する。その姿は現実とも幻とも判断し難く、ただ彼がはめている指輪

の感触のみがエドワードに生々しく伝わってくる。ブラウニーに会いたい想いに駆られているエドワードは、幻だと自らに思い込ませてその場を立ち去る。

The fact was that Edward had believed, had decided, that he was seeing something unreal, and he had gone away. (GA P.322)

エドワードは女友達と会うことに夢中になりマークを死なせ、ブラウニーに会うことに夢中になりジェシーを見捨てるという同じ過ちを犯してしまったのだ。体験を重ねることで人は必ずしも欺満に満ちた自己から脱し、善に至るわけではない。悲劇的な体験が、我々に澄んだ目を与えてくれるわけでもない。人間は同じ過ちを生涯繰り返す愚かな存在であるのかもしれない。人間が善の道を歩むのは不可能にも近いものであろう。所詮エドワードは、罪の意識を抱え、その意識の中に閉じ込められ自虐的に生きる以外にはどうすることもできない存在なのであろうか。ブラウニーと会ったエドワードがシーガードに戻ると、館からジェシーの姿は消えている。

この後エドワードはシーガードとロンドンを頻繁に行き来する。ジェシーを捜し求めてロンドンに舞い戻ったエドワードは、マークのみならずジェシーまでも見殺しにしてしまったのではないかとの罪の意識にさいなまれ続け、永遠に苦しみから逃れることは不可能であり、人間としての尊厳をも失ってしまったかのように感ずる。エドワードをシーガードに誘った占い師のところで、彼はテレビに映し出されたジェシーの姿を見、再びシーガードへと引き返す。そこでエドワードは幻が現実となってしまったことを知る。川底に死んで横たわっているジェシーの第一発見者となってしまったのだ。ジェシーの指輪を抜き取ったエドワードは、またロンドンに戻る。ロンドンに戻ったエドワードはシーガードにいないはずのイローナがヌードダンサーをしていることを知り、人生の不条理と人間のはかなさをイローナの幼い裸体を見ながら感ずる。義父ハリーとの不倫の末、義兄スチュワートに唐突な恋愛感情を抱く叔母のミッジを訪れたエドワードは、ミッジの幻想の糸を解き解す。

この様にエドワードはジェシーの死の前後にシーガードとロンドンをせわしなく行き来する。ジェシーの死の幻を見てロンドンに戻ったエドワードを待ち受けていた状況は、求めるものを一切発見することなく、周囲の人々の愛情を受け入れる事も出来ず、惨めさのうちに心を閉ざすのみであったが、ジェシーの死後、エドワードは打って変わったように澄んだ目を持ち、ミッジに現実を見つめる目を開かせ、シーガードの魔力から解放されたイローナと出会う。ジェシーの死は、エドワードに何をもたらしたのか。ジェシーは死をもって自らに取り付いた指輪の呪いを解き放った。ジェシーの中に辛うじて残っていた善の力が、暗黒の力に支配されることを拒絶したかに思われる。また、ジェシーはその死により、エドワードを捕らわれていた死の幻想の淵から呼び戻したことになる。ある意味では、ジェシーの死はエドワードの贖いとなったのである。もちろん、エドワードの犯した罪の浄化という意味の贖いではなく、犯した罪に捕らわれ他者との交わりを拒絶し、自らの苦しみをもてあそぶような閉鎖的な生き方をジェシーの死が贖ったのだ。

白で象徴されるスチュワートは逆説的に不完全さを表すことは既に述べたが、日常生活において絶対的な純粋さや完全さを人間が持つべきだとするスチュワート的な生き方は、人間を否定することにつながり、そのような絶対的な力を人間の営みの中に求めようとしたスチュワートは、ジェシーに「白き者、死人」と断定されたのであろう。実際の人と人の結び付きは危ういものであり、一人一人の人間は弱い

ものである。絶対的な力を求めるスチュワートがミッジを幻想に引き込む役割をし、人間としての弱さと危うさを備えたエドワードがミッジの幻想を覚ます役割をしたのもうなずける。ミッジはこの二人の若者を次のように語っている。

Stuart had seemed so authoritative, so complete, something lethal making all her previous existence worthless, inspiring that terrible craving, that pain, which could only be alleviated by his presence and feared like death itself the possibility of banishment. Edward, who had been suffering so terribly himself... appeared here on the side of the ordinary world where absolute choices between life and death did not take place, where reason, gentleness, compassion, compromise brought about viable ways of life. (GA P.486)

善と悪の力を備えた予言者としてのジェシーは死をもってエドワードの贖いとなったが、同時にジェシーがエドワードに残した指輪によってエドワードは弱さと危うさを常に引きずる人間から脱することは不可能な存在ともなった。

物語は、クライマックスを迎えずに終息へと向かう。まるでマードックが読者に登場人物の行く末を委ねようとしているかのようである。¹⁰⁰ それぞれの放蕩を終えたエドワード、スチュワート、ハリーの三人は再び元の生活に戻る。彼らの抱えている問題は何等解決したわけではないが、三人とも表情には静かさが満ちている。悟りの境地に至ったわけではないが、自らの弱さと罪に気付いた人間が持つ真摯さが、この小説を静かな安らぎに満ちた終わりへと導いている。

エドワードをシーガードへと誘ったのは、神秘の糸ではなく、すべてトーマスの企てであり、ベティーナが言うように、ジェシーはエドワードが息子かどうか見分けがつかないほどもうろくしていたという現実の背後には、エドワードを再生へと誘う現実も用意されていたのである。ジェシーの死後、彼の寝室でエドワードは二年前に書かれたジェシーの遺書を発見する。遺書にはジェシーの死後、彼の財産はすべて息子エドワードの所有とすると書かれていた。

I, Jesse Aylwyn Baltram, hereby bequeath everything of which I die possessed to my dear much loved son, Edward Baltram. (GA P.482)

ジェシーは二年も前に、エドワードがシーガードへ来ることを予言していたのだ。エドワードは真に父親を発見したのである。息子の存在を認め、愛してくれる父親を。ジェシーのこのメッセージこそエドワードを再生へと導いたと言える。生まれてこの方ほとんど会ったこともない父親が、自分のことをこの様に想ってくれていたという事実は、孤独と破滅の道を辿りつつあったエドワードに光を与えたに等しい。エドワードはこの時以来、『放蕩息子』のように、“Father, I have sinned against heaven and before thee”と素直に言える人間、ありのままの姿を自らの内に受け入れることが可能となったのであろう。

マードックの人間を見る目は、年と共により広くおおらかになってきているように思われる。人間存在そのものを受け入れようとすればするほど、作者の姿勢は曖昧となり、アンチ・クライマックスの形で結末を迎えざるを得ないのであろう。我々はすべて、心に欠落感を抱きつつ、さ迷う放蕩息子にも等

しい存在であろう。たとえ我々を待ち受けているものが、無であり、死であっても、我々の放浪が意味を持たぬわけでは決してない。聖書の放蕩息子が最後には父親の大きな愛に抱かれるごとく、我々の生も、たとえいかなる生を生き抜こうとも、大きな力に守られているとマードックは考えているのではなからうか。エドワード、スチュワート、ハリーをはじめ、登場人物達は、それぞれ異なった生き方を模索しており、作者はそれらすべてに等しく光を当てている。善に至る生き方のみに価値があるのではなく、人間の生の営みは、すべて何らかの意味を持つものであると、作者の視野は大きく広がっている。Peter J. Conradi はマードックのそのような姿勢を高く評価している。¹³

マードックは本作品において、過去に犯した罪の救済ではなく、人間存在そのものの救済を語ろうとしている。そして、その救済は死後の世界へ持ち越されるべきではなく、現実の世界で成されるべきであると考えている。エドワードが最後に辿り着いた「日常生活において良いと思うことをしたい（“I'll try to do some good in the world”）」（GA P.517）は、作者の結論にも等しい。弱さと危うさを備えた存在でありながらも、人と人の結び付きの中で少しでも良く生きていこうとする主人公の姿勢が作者の視点であることは、マードック自身が本作品の出版より二ヶ月前のインタビューで語っていることから伺える。

There's nothing beyond the grave. "Everything is happening here and now."¹⁴

Notes

- (1) Iris Murdoch, *The Sovereignty of Good* (London : ARK, 1970), pp. 92-95
- (2) Iris Murdoch, *The Good Apprentice* (Penguin Books, 1985), p. 511
以下、同書からの引用は本文中に、GA と頁数をもって示す。
- (3) 四宮満, 『アーサー王の死』(法政大学出版局, 1991), p. 8
- (4) Peter J. Conradi, *Iris Murdoch : The Saint and the Artist* (London : Macmillan, 1986), p. 276
- (5) 四宮満, p. 197
- (6) Elizabeth Dipple, *Iris Murdoch : Work for the Spirit* (London : Methuen, 1982), pp. 242-243
- (7) Niall MacMonagle, 'Murdoch Magic', *The Irish Times*, Monday, July 22, 1985.
Niall MacMonagle talked to the novelist Iris Murdoch. She was brought up an Anglican but gave up Christianity for Marxism in her later teens. Later she rediscovered religion and is returning to something akin to Christianity. She believes in Christ, in Buddha—"they were both men, they lived." but she doesn't believe in a personal God.
- (8) アト・ド・フリース著, 山下主一郎他訳, 『イメージ・シンボル事典 (Dictionary fo Symbols and Imagery)』(大修館, 1984), p. 345
- (9) 松原秀一, 『アーサー王と宿命観』, ユリイカ, (青土社, September, 1991), p. 208
- (10) J. R. R. トールキン, 瀬田貞二訳, 『指輪物語 (The Lord of the Rings) 1』, (評論社, 1977), pp. 83-84
- (11) 岡田純枝, 『アイリス・マードックと語る』, 英語青年, (研究社, May, 1990), p. 20
- (12) Deborah Johnson, *Iris Murdoch*, (Brighton : The Harvester Press, 1987), p. 106
...*The Good Apprentice* (1985) is very moving because of its refusal to sum anything up : it leaves the door open for all the different ways in which the characters whithin the novel and the audience outside the novel choose to read their human experience.
- (13) Peter J. Conradi, p. 273
- (14) *The Irish Times*, 1985
なお『アーサー物語』については、厨川文夫・圭子訳, 『アーサー王の死』(筑摩書房)を参考にした。